

自著と  
その周辺

## 医療経済学15講

細谷 圭・増原宏明・林 行成

新世社  
ISBN : 978-4883842841  
290頁  
2018年11月刊行  
2,400円

入門レベルの「医療経済学」の教科書を、主に文系学部の大学2～3年生向けに執筆しましたので、ご紹介いたします。筆者は経法学部で主に医療経済学の教育に携わっていますが、このような機会を与えていただきましたことに、感謝申し上げます。

文系の学生は、将来医療職として働くわけではなく、また現在は健康であるため、医学や医療にはなじみもありません。しかし、将来、公務員や病院の事務職として、医療や介護に携わることもあります。また医療は国民一人ひとりの負担によって支えられており、私たちは患者として医療に関わるとともに、医療のスポンサーとなり、同時にオーナーにもなります。望ましい医療のためには、医療を俯瞰的に眺め、医療に対する価値観をもつことが必要とされます。しかし医師やコメディカルでない限り、そのような教育トレーニングを受けておらず、知識を適切に修得するのも困難です。

このような背景のもと、医療を経済学的に分析する視点を修得することを目標に執筆されたのが本書となります。経済学は、主に効率性と公平性という物差しを用いて、望ましい社会状態の性質をあぶり出し、理想的な状態はいかにして実現できるかを導き出す学問です。医療経済学としては、財源の確保の方法、資金配分方法、効率的な医療提供体制などとなります。しかしながらこれらの問題を、文系学生に理解してもらうのは、実はかなり困難なことです。そこで本書では、以下のような工夫を行い、初学者にとっての障壁が低くなるように心がけました。第1に、医療経済学のテキストとして包括的な内容を取めたことです。医療経済学は、経済理論・データ分析（計量経済学）・医療制度論がベースとなります。それぞれをわかりやすく説明した教科書は存在しますが、入門レベルとして、3つをバランスよく収めるように心がけました。第2に、初学者にとって理解が少しでも進むよう、学問的な厳密性にはある程度目をつぶり、「流れ」を重視したことです。また医療分野の専門用語は、初学者にとっては聞きなれないことにより思考停止に陥り、理解が進まないケースがあります。そこで適宜説明を加えることで、難解な専門用語による理解不足を排除しました。

本書は15章構成からなります。以下に簡単な概要を述べます。序論では、本書の準備として、医療サービスの持つ3つの特徴（侵襲性・不確実性・情報の非対称性）に触れます。第1章は社会保険のしくみを簡単に触れ、データを用いて医療費の実態を探ります。第2章は医療保険制度を説明します。第3章では、高齢者の医療・介護の制度を扱います。高齢者を保険としていかに支えるのか、それに伴いどのような問題が起きるのかを理解できます。

第4章では、医療を経済学的に分析するツールであるミクロ経済学を説明し、第5章は、医療サービスの需要について、不確実性や情報の非対称性の観点から触れます。保険というサービスの限界と、公的医療保険の必要性が明らかとなります。第6章は、「供給者誘発需要」仮説を説明し、データでこれを検証できるのかも議論します。第7章は、わが国の医療提供体制を説明し、医療の機能分化の必要性を明らかにします。第8章は、医療における競争と規制、医療計画と基準病床数制度などを例に挙げながら説明します。第9章は、薬価基準制度と医薬品産業について解説します。とりわけ薬価の決定ルールが製薬企業の研究開発や商慣習に及ぼす影響を議論します。

第10章は経済格差と健康・医療の経済分析を、第11章は健康投資や健康水準とマクロ経済パフォーマンスに関する議論を説明します。第12章は、医師の労働市場と医師不足の問題を、マッチング理論を使い議論します。第13章は医療データの特徴とその分析方法について、第14章は諸外国の医療制度を4つの国を例にとり説明します。第15章は最後のまとめとして、医療改革を考えるにあたっての議論をまとめます。

以上が本書の概要であり、内容は多岐にわたりますが、全部を読むことで、医療に関する経済学的な思考を大雑把に修得できるようになります。もちろん専門家向けではないので、臨床の現場で生かせるものではありません。また初学者向けゆえに、「薬剤経済学」については、内容がどうしても本書のレベルを超えるため、扱うことはできませんでした。しかし、初学者が本書を通じて医療の入り口に立ってもらい、その後の専門知識へと誘導できれば、本書の試みは成功すると考えています。

(信州大学経法学部 増原宏明)